東亜同文書院記念基金会ニュース

第15号　2013年4月～2014年3月

Contents

基金会だより

第20回　東亜同文書院記念基金会授賞式　－02
東亜同文書院記念基金特別奨励賞・栄誉賞授与　－09
書院の皆さん、今に思いを語る　－10
本間先生欽慕の会・根津山洲先生墓参・荒尾東方斎先生墓参　－22
愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 退任・新任の挨拶　－25
東亜同文書院大学記念センター活動レポート　－26

発行／愛知大学東亜同文書院大学記念センター

基金会ニュースは、創刊以来、第14号まで高瀬恒一氏（41期）の編集により発行されてきました。
永きにわたり、ご尽力頂きました高瀬氏に感謝申し上げます。第15号より愛知大学東亜同文書院大学記念センターが担当いたします。

第20回東亜同文書院記念基金会授賞式

第20回東亜同文書院記念基金会授賞式が２０１４年1月28日、霞山会館にて催されました。

この顕彰事業は、東亜同文書院記念基金会によるものであり、その目的は、東亜同文書院およびその経営母体であった東亜同文会にかかわる研究や調査成果、および啓蒙的活動のうち、顕著な実績を認められた個人、団体や組織を顕彰するものです。東亜同文書院記念基金会を構成する滬友会（書院同窓会、２００７年解散）、霞山会、愛知大学東亜同文書院大学記念センターからの推薦により同理事会において選出しており、１９９３年の第1回表彰以来、本年度で第20回目となります。

これまで、書院生の大旅行に関する研究成果や東亜同文会の資料に基づく研究、東亜同文書院や東亜同文会の出版物のデータベース化事業、東亜同文書院生や卒業生による日中交流に関するメディア報道、その他日中交流の活発な活動などの成果に対して顕彰してまいりました。

第20回となる今回は、**記念賞**として、岡部達味氏（東京都立大学名誉教授、元霞山会理事）、**功労賞**として平井誠二氏（公益財団法人大倉精神文化研究所研究部長）が選ばれました。

ここでは、山田正氏（一般財団法人霞山会理事長）、藤田佳久氏（愛知大学名誉教授）による推薦のことばと、岡部達味氏、平井誠二氏の受賞挨拶を紹介させていただきます。

また、続いて開催された懇親会の様子も、あわせてご紹介いたします。

〔推薦の辞〕

東亜同文書院記念基金記念賞

岡部　達味　殿

山田　正（一般財団法人霞山会　理事長）

第20回東亜同文書院記念基金会記念賞に、岡部達味・東京都立大学名誉教授を推薦いたします。

岡部先生のご経歴をご紹介申し上げます。岡部先生は、１９５５年東京大学教養学部（国際関係論分科）を卒業なされ、同年同大学院国際関係課程修士課程に進学、１９５７年に課程を修了されました。

１９５７年からＮＨＫ解説委員室に勤務され、１９６０年から６１年まで、フルブライト留学生として米国ワシントン大学に留学されました。１９６３年にＮＨＫを退職され、国際基督

教大学助手（１９６３～６７年）に就任されて学究生活に入られました。
１９６６年から６７年にかけて国際基督教大学を休職し、在シンガポール日本大使館研究員をお務めになり、帰国後に東京都立大学法学部講師に就任され、以後、助教授（１９６８～７５年）、教授（１９７５～９５年）を歴任されるなかで、１９８４年から８７年まで法学部長を務められました。なお、１９７３年には、東京大学より博士号（社会学）を授与されております。
東京都立大学勤務中の１９７３年から７４年にかけまして、シンガポール南洋大学客員准教授、１９７９年から８０年にかけましては在中国日本大使館特別研究員をお務めになっております。１９９５年、同大学を定年退職された後、名誉教授となられ、同年から２００３年まで専修大学法学部教授を務められております。
岡部先生はご専門の中国政治・中国外交においてわが国を代表する研究者としてご活躍され、また学術研究にとどまらず、新聞、雑誌などのメディアを通じてわが国論壇でも世論をリードする役割を果たされてきました。１９８８年から８９年までアジア政経学会理事長としてわが国のアジア研究の発展に貢献するとともに、日中関係においても慶應義塾塾長の石川忠雄氏の後を受けて、１９９７年から２００１年まで日中友好21世紀委員会日本側座長を務め、日中間の相互理解促進に寄与されました。
余談ではありますが、第二次大戦後のわが国における中国研究を牽引した代表的研究者である衛藤瀋吉・東京大学名誉教授、石川忠雄・慶應義塾塾長というお二人の碩学と岡部先生とのご関係について付言させていただきますと、岡部先生が国際基督教大学時代に、衛藤先生の実証的研究に感銘を受け、ご本人曰く「押しかけ弟子」となられ、そのご縁もあって東京都立大学へ移られる際にご推薦をいただいたそうであります。
また、石川先生との信頼関係は、日中友好21世紀委員会にとどまらず、石川先生が当会理事をお務めになられていた時、岡部先生を理事にご推薦いただきました。岡部先生には、１９８８年から昨年６月までの25年の長きにわたり当会理事を務めていただきました。その間には当会の実施しておりました中国派遣留学生の選考委員もお願いしておりましたし、ご講演、シンポジウムへのご参加にとどまらず、当会の発行する月刊『東亜』でもご健筆を揮われ、当会事業の発展に多大なご協力、ご貢献をいただいてまいりました。
岡部先生が師と仰がれた衛藤先生は、１９８３年に当会が刊行いたしました『東亜同文会史』に序文を寄せられ、また２００１年５月に愛知大学東亜同文書院記念センターで開催されました「東亜同文書院創立百周年記念式典」におきまして「長江の流れは絶えず」と題する記念講演を行っております。衛藤先生は、東亜同文会、東亜同文書院の果たした歴史的役割を非常に高く評価されておりました。この衛藤先生のご研究の系譜を継ぐ岡部先生が東亜同文書院記念基金会の記念賞を受賞されることになれば、私どもといたしましては誠に感慨深いものがございます。

〔受賞挨拶〕

東亜同文書院記念基金記念賞

岡部　達味
（東京都立大学名誉教授、元霞山会理事）

岡部達味でございます。ただ今諸先生方から、過分なお誉めの言葉をいただきまして、身が縮むような思いをしております。私、あと2か月ほどで82歳になりますので、ほかのところへ行けば、最長老というふうに見られているわけでございますけれども、東亜同文書院関係、それから霞山会の関係でも、特にかなり以前の段階におきましては、たとえば理事会の理事の末席を汚させていただいた、最初の頃ですね、周りにいらっしゃる方々が大先輩ばかりで、私が一番若造という状態でありました。そんな若造と思っていますうちに、いつのまにか現役の人々からは、長老と見られる歳になってしまいました。本日は久しぶりに若造に還ったような感じで、そして東亜同文書院の賞をいただくという、たいへん名誉な授与式に出席させていただいて、たいへん嬉しく存じております。

私、年齢的に東亜同文書院自身との接触はなかったわけでございますけども、霞山会とは、わたくしが中国研究を始めました初めの頃から、非常に密接に関係をさせていただいておりまして、『中国総覧』というのが、あちこちの別のところで出版されていたのが、霞山会の出版ということになったそのとき以来、ずっと執筆を続けておりました。先ほどのご紹介にもあったのですけれども、シンガポールへ行ったり、中国へ行ったり、一年間以上の単位で、そういう海外生活もいたしました。その間も、霞山会から出版されております『中国総覧』に、シンガポールで「日中関係」についての原稿を書くというような、無茶なこともいたしましたけども、それだけ深く関係を保たせていただいてきておりました。

その霞山会から受賞をさせていただけるということで、私たいへん嬉しくかつ、恐縮しております。まさに、このような先輩方に多数ご出席いただいている中で、受賞させていただくということは、光栄この上ないことでございます。ご推薦をいただき、たいへんありがたく思っております。今後とも諸先生方のご健康と、ご研究の発展を祈り、私も及ばずながら、努力を続けますことを申し上げまして、お礼のご挨拶に替えたいと存じます。

〔推薦の辞〕

東亜同文書院記念基金功労賞

平井　誠二　殿

藤田　佳久（愛知大学名誉教授）

ただ今ご紹介いただきました藤田です。愛知大学を２０１１年に定年退職し、現在は記念センターフェローとして引き続き携わっています。今回はちょうど20周年ということで記念すべき年でして、岡部先生と平井先生が受賞されたことに、お祝い申し上げます。

私が平井先生の推薦をさせていただきましたが、大倉邦彦氏は書院の卒業生で３期生であります。大倉邦彦先生、旧姓江原さんです。私は卒業生へのインタビューをさせていただいて、佐賀県へ出かけたことがありますが、佐賀県のご出身の書院の方々は皆さん、大倉先生を大変尊敬しておられました。

大倉先生は戦前「大倉精神文化研究所」を設立されました。これは皆さんもご存じかと思いますが、横浜市にあります大倉山記念館ですね。平井先生はそこの研究員として、平成５（１９９３）年から勤務されました。お話を聞きますと、その前からすでに非常勤で勤めておられたということです。大倉邦彦先生の幅広いご関心は環境分野でして、非常に多岐にわたった方であられました。精神文化研究所のいろんなプロジェクトが（推薦文に）書かれていますが、この研究所で、倫理学・哲学・教育・宗教・経済・実業界等の幅広い分野をカバーしてこられました。それを平井先生はフォローしながら、それら研究分野に焦点をそれぞれ当てて、数百ページにわたります厚い機関誌『大倉山論集』を毎年出されるというすごい成果に、大変敬服しております。この『大倉山論集』に多くの研究者を動員させるという、これも大変なことですが、成果を毎年蓄積されました。この努力は大変だったのではないかなと思いますけど、それだけ多くの成果が集まりました。

それで、その中で我々のことに関連したことといいますと、一つは書院の卒業生として根津一院長の精神を、大倉先生がかなり受け継いでいたと解釈できるということです。その大倉先生に多くの研究者とともに光を当て、実業界から招かれて東洋大学の学長になられてから大倉先生が学園のピンチに直面しまして、そこでやられたことは、拓殖科の新設や中国関係の科目の設定などでして、まさに書院をモデルにして東洋大学を建て直したというふうに思われます。そのような、あまり知られていなかったことについて、平井先生の研究は、多くの研究者の方々をまとめられて、成果として総合的に浮かび上がらせてこられました。その貢献は非常に大きいと思われます。

二つめはですね、当然だと思うので

すけど、東亜同文書院関係にも強い関心を持たれまして、多くの史資料収集を行なってこられ、愛知大学の記念センターにもお見えになり、東亜同文書院へのご関心をさらに持って下さいました。そういう関心の線上で、機関誌にも「東亜同文書院特集」を連載され、各分野の方を集められまして、ご自身の執筆も含めて健筆をふるわれました。東亜同文書院関係の論文を収録させて、これも大倉邦彦氏との関係も含め、東亜同文書院研究を深化発展させてこられました。

そして三つめはですね、とくに愛知大学との共催の公開講演会を、２００３年以来毎年開催していただいております。愛知大学の研究者を毎年お招き下さり、研究成果を講演会で発表させていただいています。その中で東亜同文書院の研究成果や、現代の中国動向についての啓蒙的な講演を重ねることができています。そういう意味では、関東地方の一円に、東亜同文書院と愛知大学の存在を広く知らしめてこられました。

このような、多方面にわたります企画・運営活動に対しまして、平井先生の功績は非常に大きく、我々としましても十分評価させていただきます。以上の観点から、平井先生を東亜同文書院記念基金功労賞に推薦させていただきます。

〔受賞挨拶〕

東亜同文書院記念基金功労賞

平井　誠二
（公益財団法人大倉精神文化研究所
研究部長）

平井と申します。本日は功労賞をいただくことになりまして誠にありがとうございます。賞をいただけるようなことをしたつもりは全くございませんでしたので、お話を伺ったときには大変驚きました。ご推薦くださいました藤田佳久先生にとても感謝いたしております。また先程は過分なご紹介をいただきまして恐縮いたしております。

20年ほど前に、大倉精神文化研究所の研究員になりまして、それから間もなくだったと思います。東亜同文書院大学記念センターの展示室がオープンする直前に、初めて愛知大学に調査に伺いました。それから何度もセンターの資料室や、大学の図書館で、数多くの資料を調査させていただきました。

先ほど藤田先生がご紹介下さいましたように、大倉精神文化研究所の創立者は大倉邦彦と申します。大倉邦彦は東亜同文書院の第３期生でして、明治３６（１９０３）年９月に入学して、根津一院長から直接授業を受けたと聞いております。今日お見えの第42期生の植前良平様が大倉邦彦と交友があったと知り、平成10（１９９８）年に聞き取りをさせていただいたことがあります。この建物ができる前の、霞山会館の古い建物でお話を伺いました。その時、植前様からは、大倉邦彦の書斎には根津一先生の、実物大に近い大きな胸像がいつも飾ってあったというお話を伺いました。大倉邦彦が根津一先生のことを生涯にわたり非常に尊敬していたことを教えていただいたことが、その後の調査研究の原動力となりまし

た。植前様は、大倉邦彦が植前様へ宛てたハガキを大切に保存されておられましたが、この時、研究所に寄贈してくださいました。資料を登録して、今でも大事に保存・活用しております。

大倉邦彦が東洋大学学長を務めたとき（１９３７～４３年）、東亜同文書院のことを参考にして、大学の再建に励んだというのは、先ほど藤田先生がおっしゃっていたとおりだと思います。大倉精神文化研究所は、昭和７（１９３２）年創立の研究所です。入口のところでお配りいただいたチラシにも書いてございますが、研究所設立の目的には、「東西文化の融合」と「実社会への働きかけ」があります。西洋の国々と対立するのではなく、東洋文化の良いところを大切にしながらも、西洋文化の良いところも取り入れて、それを現実社会に生かす。研究をただ学問のための学問にするのではなく、「研究成果を日常生活・市民生活の中で生かすことにより、人格者を養成し、社会を良くする」、そういうことを謳って研究所を創りました。それは、大倉が学んだ書院精神につながっているのだと考えております。そのことをより具体的に明らかにしたいとの思いで、毎年少しずつ研究や事業活動を行ってまいりました。しかし、自分は研究者でありながら、自分自身では実際にはあまり何もしておりません。様々な専門分野の先生方にお願いして研究していただいたというだけです。自身では何もしてないので、忸怩たる思いがございますが、長年に亘る大倉精神文化研究所の活動とその成果を評価していただいたということだと思いますので、とてもうれしく思います。

大倉邦彦は東亜同文書院の卒業生であると申しましたが、実は書院とはもう一つご縁があります。大倉は、戦後、昭和34（１９５９）年から37年頃にかけて、滬友会の母校再建委員会の委員長をしております。戦後の一時期、日本は占領下におかれていましたが、その頃愛知大学は、東亜同文書院との関係についてあまりはっきりしたことが言えなくて、東亜同文書院の同窓会である滬友会との間で、誤解が生じてしまったと聞いております。皆様のほうがよくご存じかと思います。占領が終わった後もそうした誤解が長い間残りました。滬友会の当時の会員の方々は、日本国内に東亜同文書院大学を再建したいと考えられ、母校再建委員会を作られました。大倉邦彦は、年長だったということもあり、推薦されてその委員会の委員長に就任しております。大倉邦彦は数多くの著作を残しておりますが、プライベートと申しますか、自伝的なことをほとんど書き残しておりませんので、大倉自身がこの時どのように考えていたのかは分かりません。しかし、その母校再建委員会関係の資料が、研究所に保存されております。そういう資料や、愛知大学で調査・収集させていただいた資料などを見ますと、大倉邦彦が、東亜同文書院に強い影響を受けていたこと、卒業後も書院の関係者の皆様と深い交流があり、書院精神を大切にしていたことが、よくわかります。

大倉邦彦は昭和46（１９７１）年に死去しましたが、おそらく東亜同文書院と愛知大学との関係を誤解したまま、亡くなったのではないかと思います。しかし、藤田先生を始め多くの方々の

ご努力により、そうした誤解も次第に解けて、東亜同文書院の卒業生の皆様と愛知大学や霞山会が協力して、こういう会が開かれ、あるいは東亜同文書院大学記念センターで様々な活動が展開されています。そうした現状の中で、大倉邦彦の事績を研究している私が功労賞をいただけたということは、大倉もとても喜んでくれているだろうと思います。

東亜同文書院研究につきましては、平成16（２００４）年度の『大倉山論集』第51輯で特集を組みました。その時に母校再建委員会の資料で論文を書こうとしたのですが、編集作業等をしている間に時間が足らなくなって、その時は一度断念しました。最近になって、いろんな方から母校再建委員会についてまとめるようにアドバイスをいただいておりました。偶然にも関係ある賞をいただきましたので、母校再建委員会の皆さんの書院に対する情熱や、当時何をしようとしていたのかを、改めて『大倉山論集』できちんと報告をしなければならないと、心に誓った次第です。

それから、授賞理由の一つに、愛知大学同窓会の神奈川支部の皆様との公開講演会が挙げられております。横浜市にあります研究所の本館建物というのは、現在は横浜市所有の建物になっており、「横浜市大倉山記念館」と呼ばれております。その建物で同窓会神奈川支部の皆様が、毎年公開講演会と支部総会を開催されております。私共の研究所は、公開講演会を共催させていただいておりますが、私共は受付をしたり会場の設営や撤収をしたりというだけで、本当に大したこともしておりません。市民向けの公開講演会を10年にわたって続けることができましたのは、歴代の会長・役員の皆様のおかげと感謝いたしております。

今後も事情の許す限り、同窓会の皆様と協力して、愛知大学や東亜同文書院のことを神奈川で発信し続けていきたいと思っております。

今年の秋には、若い研究員を連れて、また愛知大学で資料調査をさせていただく計画を立てていたこの時期に、賞をいただいたのも不思議なご縁で驚いています。今後も、功労賞の名に恥じないように研究活動を続け、講演会や展示会、広報活動などを行なっていきたいと思っております。本日は誠にありがとうございました。

東亜同文書院記念基金特別奨励賞
東亜同文書院記念基金栄誉賞　授与

東亜同文書院記念基金会では、書院への理解を深め、伝統を引き継いでいくことを期待して本学学生へ２種類の表彰をしております。１９９９年度より**「東亜同文書院記念基金栄誉賞」**を設け、卒業式において、人物・学業成績が優れた者を表彰しています。また、２０１３年度より**「東亜同文書院記念基金特別奨励賞」**を設け、入学式において入学試験の成績が最も優秀な入学者に対して、同賞を贈っております。

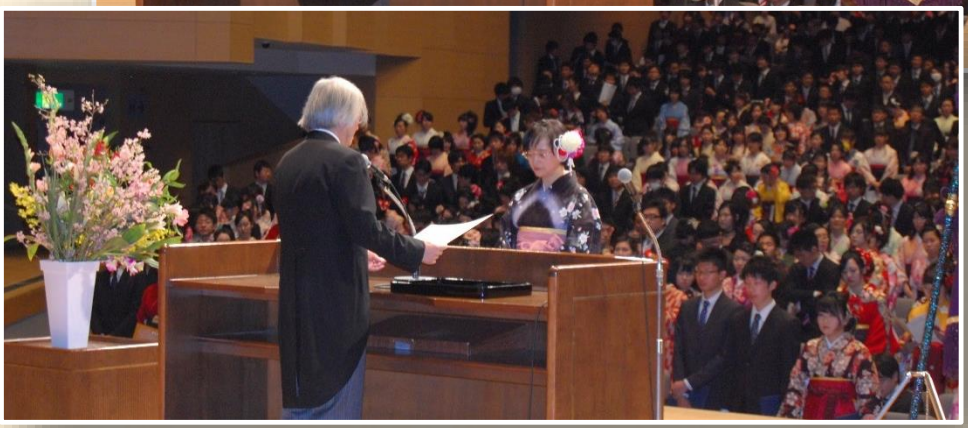
【２０１３年度受賞者】

東亜同文書院記念基金特別奨励賞

宮崎　琴巳（法学部１年）

東亜同文書院記念基金栄誉賞

宮崎　眞理子（国際コミュニケーション学部４年）



【基金会役員名簿】

会長
佐藤　元彦
（愛知大学理事長・愛大学長）

副会長
山田　正
（霞山会理事長）

理事
藤田　佳久
（愛知大学名誉教授）
星　博人
（霞山会常任理事）
馬場　毅
（愛知大学東亜同文書院大学記念センター長）
鈴木　修
（愛知大学常務理事）

監事
岡村　幹吉
（岡村会計事務所）

書院の皆さん、今に思いを語る

授賞式の後、懇親会が催され、書院卒業生や関係者の方からお言葉をいただきました。

司会（中島） 今日は基金会のメンバーの中にご婦人の方に来ていただきました。何人かにお声をかけさせていただき、本日お二人みえました。ご紹介をしたいと思います。39期の阿部弘さんの奥さんです。

阿部光 昨（2013）年3月に主人が亡くなりました。93歳でございました。私とは少し年が離れておりますけど、ちょうど結婚50周年の年に、結婚記念日よりは一ヶ月ばかり早く亡くなりました。滬友会・霞山会の皆様には大変お世話になったんだと思っております。今日は中島寛司様から是非出席をというお便りをいただきまして、あつかましくも出席させていただきました。本当に生前、主人が色々とお世話になったと思います。ありがとうございました。

司会 阿部さんとの思い出は色々あります。愛知大学と滬友会との繋がりは靖亜神社への墓参がスタートですね。それと同時に寮歌祭の提携というか、ご一緒したのがきっかけです。阿部さんには、靖亜神社への墓参のときに中心的な応援をしていただきました。一番大きいのは、山田純三郎さんの四男、順造さんと阿部さんが同期なんですね。順造さんが孫文の史資料や、純三郎さんの持ってた史資料をご自身で持っていて、それを（展示するために）自分で記念館を作ろうと考えていたんですけれども、色々な事情により実現することができなくて、それをどうしようかと同期生とで悩んでおられたときに、阿部さんが仲介をして愛知大学へ寄贈していただいたといういきさつがあります。現在、記念センターにある孫文の史資料は、阿部さんたちが中心になって寄贈していただいたという経緯があります。そういう点で今日の賑やかな基金会授賞式を見て、阿部弘さんも喜んでいらっしゃると思います。

藤田名誉教授 阿部さんから私のところへ連絡が突然入って、何月何日に東京へ出てこいというふうに言われまして、何事だろうと出てきたわけでございます。そうしましたら、順造さんの

お宅へ連れていっていただいて、(お話は前からちょっと伺っていたんですけど、)順造さんのお姉さんが植物状態患者(註:幼児の時の事件で知的障害に)だったんですね。部屋にずっとおられて、その部屋に、今愛大にある多くの孫文関連の史資料が埋もれてあったんです。丁度今、奥さんが病院へ出ておられ、今日は誰もいないからと、阿部さんがご案内をしていただいたのですね。これは素晴らしいと思いまして、それから愛知大学にぜひ下さったらありがたいなという話をしまして、阿部さんからも、絶対に愛知大学へ勧めるようにするからというお話がその時にあって、その結果として膨大な生の資料が愛知大学に寄贈されたのです。そういうきっかけを作っていただき本当に感謝しています。今愛知大学に記念センターがあるのも、まさに阿部さんのお陰です。改めてお礼を申し上げます。

司会　そういう点では、孫文と日本との関わりは非常に深いものがありますね。1月11日に関東4支部の新年会がありまして、その時に孫文の支援をした梅屋庄吉のひ孫さんが、孫文との関係をいろいろと話されました。この話に関係する内容は、2月16日にテレビで放映されます。また皆さんにご案内します。孫文、それから東亜同文書院、愛知大学との関係が今に続いていることを皆さんにご認識いただければと思います。

40期の田沼菊弥さんのご夫人田沼敏子さんにおこしいただいております。

田沼敏子　初めまして。40期田沼菊弥の家内でございます。今日は中島さんのご紹介で、はからずもこちらに出席させていただきました。皆様に色々とお世話になりっぱなしで何も恩返しができませんが、今後ともよろしくお願い致します。

司会　先ほどの高遠さんのお話のように、この基金会授賞式も20回を迎えました。基金会の設立には39期、40期、

41期、42期あたりの皆さんが中心になられました。それから、100周年記念を行った際には、豊橋や名古屋を中心にして、愛知大学名古屋校舎(註:当時の三好校舎)等を見学しながら講演会やいろんな行事をしました。その時に、田沼さんがご主人の成績簿を見たいということで、取り寄せてもらい、それを見てご主人の成績が非常に素晴らしかったので、また惚れ直したということを聞いております。いろんな思い出を重ねながら、皆さんご夫婦が、書院をきっかけにして幸せな人生を送られ、これからも皆さんとのご縁を大切にしてほしいと思います。ありがとうございました。

書院の皆さん、本日はせっかくおいでになりましたので、一言、お話を聞かせいただければと思います。それから、皆さんと元気に寮歌を歌いたいと思います。それでは42期の小崎さんに一言お願いします。

小崎昌業　僕は戦後外務省に入って、外務省をやめてから霞山会の常任理事をやって、それをやめて、今は東亜同文書院大学記念センターの運営委員をやっています。これは現在、ただ一つ残った肩書です。僕は同文書院関係ではいろいろやらせていただきました。センターの仕事として、同文書院関係で戦前の同文書院がどうあったかということを広く日本のみならず世界中に知らせようということで、文部省から補助金をいただき、活動しました。5年間でしたね。その間歩いたところは横浜、東京、それからいろいろありました。日本中をあちこち歩いたんです。アメリカのシカゴへも行きました。僕は1963年にインドからカナダに転

任になりましたが、カナダの大使館にいて夏休みにアメリカを縦断してマイアミまで車でぶっ飛ばして行ったんですが、そのときシカゴに立ち寄ったのですね。その当時のままでしたね、シカゴは。もう落ちぶれていうような、そんな思いで行ったんだけど、案外そうでもなかったなあ。シカゴはいいところですよ。今の大統領の出身地でしょう。わりあいにいいところで。その後、文科省から再び採択を受け、それで沖縄と長崎で展示会をし、私も行きました。長崎で話をしろということで、そのとき僕は「東亜同文書院大学から外務省へ」というテーマでお話をさせていただいたんですが、たった30分で終われということで、時間がとても無くて非常に話す内容に困りました。この講演をテープ起こしして原稿にしまして、それを記念センターの本に掲載するということで現在編集をしてもらっていますが、少しここで報告しようと思います。

長崎は、上海に旅立つ前に最初に集まったところなんです。同文書院はあの当時、全国から募集し、各県、都道

府県が選抜生を派遣していました。それが最初に東京へ来て、東京の、今は軍人会館と言っていませんけれど、あの当時は軍人会館で、建物はあそこに今も残っています、九段会館です。あそこへ全員が集合して、三日ぐらい東京におって、あちこち回って、その間に行事もあれば見学など、いろんなことがありました。それから夜に出発するということで、皆が裏庭に集まったのです。そしたら、あの頃は女性が男性と話ができない。日本の女性は掃除に洗濯とやってくれるのですが、我々としゃべらない。それが行くときになったら、軍人会館の2階にみんな顔をそろえて、カーネーションを投げてくれた。そういう時代でしたね。伊勢、京都、大阪、それぞれ列車で行って、見学もありましたし、用事もあったのですが。それから長崎ですね。長崎から船で上海へ行ったのです。あの頃、我々平和な時代だと思っていたんですが。東京から来た連中は英会話がやっぱりできるんですな。アメリカ人か知らんけど、そんなのと甲板で会話をしている。翌日、上海に着き、その後上海の同文書院へ行ったんですが、同文書院はその当時は、上海事変の戦火に遭いましてね、三日三晩焼かれて何も残ってない。書院は隣にあった交通大学を租借して、そこに入っておりました。僕らが行った時、そこに入ったんだけど、それが素晴らしくきれいに見えた。赤い門で入ったら緑の芝生、大きな文治堂、ほんとに素晴らしく、別世界みたいな学園でしたね。それからしばらくは、毎日、上級生と下級生が、一つの部屋に4人ぐらい入るんですね。一人上級生がおって、我々下級生は掃除・洗濯とみんな承って、上級生は庭で朝晩、中国語の発音を教えてくれるんです。それをずっと夏休みの終わりぐらいまでやって、やっと一人で中国語が話せるなあというところなんです。上手い人はそんなことは赤子みたいなので。中日学院から来た連中は毎日遊んどったんです。とにかく入学した日に全員、滬友会っていうか、運動部会に所属して部会に入るわけです。各部会に全員入って、授業が終わると後は皆それぞれの部で活躍するわけです。非常に楽しかったですね。ああいう大学っていうのは、そんなに無いんじゃないかと思う。今でも楽しく思い出します。でも、途中から学徒動員（出陣）として、昭和18（1943）年の12月1日に兵隊になって行きましたけど、それは非常に残念でね。そんなところで、ありがとうございました。

司会　ありがとうございました。それでは41期の工藤さんお願いします。

工藤俊一　41期の工藤です。入ったのは40期なので、今日話にありました高遠君と一緒であります。私は政治も経済も疎いんで、ただライフワークの日中関係について、一言だけ申し上げたいと思います。

皆さんも非常に関心を持っておられることと思いますが。私は１９９５年から北京大学で教壇に立っておりました。その当時の教え子が今、第一線に立って活躍しております。昨年も訪日した一人が、我が家に来ましたが、その話を聞きましても、私自身が考えましても、現在の日中関係は皆さんもご承知の通り、尖閣や防空識別圏とか、いろいろ難しい問題を抱えて、おそらく戦後最悪の事態を迎えていると思います。つまり、教え子が言いますのは、北京のレストラン、その他で日本語は言えません。とても怖くてダメです。それから、あなたは身の危険を感じたことはございませんかと聞かれました。こういうことは私が中国に関係しましても、初めての経験でございます。そういうこともある現在の状態だと思いますけれども。彼らは相変わらず私に対する友好は変わらず、正月の年賀でもまた今年も訪ねて来ると言っております。これが私の心の支えであります。以上であります。

司会　ありがとうございました。その次は44期の関谷さん、同文書院の現役みたいな顔をして、元気にやっておりますのでよろしくお願いします。

関谷賢三　2、3日前に、上海にいる同期の王宏君から電話がありました。彼曰く、「元気だが、去年の前半は家内が入院していたのでどこへも行くことができなかった。後半は、家内も快復したので、あちこち回っている」とのことでした。こちらからは、近いうちに基金会の集まりがある、と話したら、皆さんによろしくとのことでした。

それから私の上海時代のことですが、私たちが上海に行ったのは昭和18年です。ところが、昭和19年から兵隊検査が1年繰り下がって実施されることになりました。私はそれに該当するので、昭和19年に兵隊検査を受けました。入営先は宇都宮の東部36部隊でした。

ところが帰国するにも、入隊に間に合う船がなかったので、領事館に相談したら、南方から内地に帰る輸送船が上海に寄港するからいうので、それに乗って帰国したのです。そのことは、当時の戦局を示す一コマではないかと、船中一人で感じたものです。それからあと一つは、船中で特高警察が動いている、という話です。私は上海を去るにあたって、何冊かの本を持って乗船しました。しばらくすると船内の空気がどうもおかしい、と直観しました。

以前から、「特高の調べは、自分では大した本ではないと思っていても、あれこれ、ややこしい」という話を知人から聞いていたので、すぐ甲板に出て、持っていた本を全部海に投げました。そして、灯台の灯りが見えなくなるまで甲板に佇んでいました。

司会　ありがとうございました。45期の福原さんです。よろしくお願いします。

福原昭二　福原でございます。昭和20（１９４５）年、南京の金陵部隊から除隊して間もなく、上海在住の日本人は特定区域へ移動するよう指示があり、我が家は北四川路南豊楽里から余慶坊へ移ることにしました。そこで生活に必要な最低限の家財以外、すべての物品を父の務め先の華中水産の運転手の黄さんに引き取ってもらいました。彼は真面目で人柄もよく、我が家になじんでいました。引っ越しは群衆の注目の中で行われ、時には荷物を運び出すと、群衆がワーッと寄ってきて目ぼしい物を奪ってしまう。我が家は当日黄さんに付き添ってもらい、無事に引っ越しを完了しました。

集中営では、一軒の家に二所帯か三所帯が住むので窮屈ではあったが、皆辛抱していました。この生活になれたころ、柔道部で同期の門田浩くん（父君の門田繁勝氏は12期の先輩）が訪ねてくれ、久し振りに二人は飲み過ぎて、彼はふらつきながら青年館へ帰って行きました。

それから暫くして黄さんから招待され、父と二人で彼の家を訪ねました。第一高等女学校の裏の方だったと思う、普通の民家だったが親類縁者が十数人、みな心優しい人たちでした。「処分品」のお礼を言われ、熱燗の老酒に心づくしの料理を美味しくいただきました。いい気持ちになって帰ったが、その翌々日父親が不調を訴えました。病院はすでに閉鎖されていて、近くに住んでいた福民病院の医師に診てもらうとアメーバ赤痢だという。エメチンを打てば治る、楊樹浦のユダヤ人マーケットで売っているというので黄さん同行でエメチン注射液を買い求めました。注射はよく効いて、入院を考えていただけに安堵の胸をなでおろしました。

青年会館で待機の書院の皆さんは、昭和20年末の引揚げ船で帰国されました。我が家は昭和21年４月の帰国です。引揚げ船から見た海の青さが目に染みました。

以上、当時の思い出です。家族のこともあったりして、いろいろ気苦労でした。

司会　ありがとうございました。それでは、44期(専門部１期)の幅舘さん。

幅舘卓哉　壇上に上がらせてもらいます。今年は西暦２０１３年ですか。私は１９２４年、中国の漢口で生まれました。父が日本郵船の上海支店から漢口支店に移った時でございました。１９２４年、大正13年に漢口で生まれました。それよりも、上海時代の思い出を、具体的に一つ二つご紹介します。昭和18年、国運ようやく衰運に向かっているとき、私は東亜同文書院に入りました。ここで予科の方がお見えでございますが、中国語の先生で坂本一郎先生からお話があった時に、実は私は頭に血が昇ったのであります。それはどういうことかと言うと、パンペン(坂本)が「専門部というのは、あれは東亜同文書院の亜流だ。我々は予科を出

てそれから本格的に移るんだ」と予科の学生が話していると。専門部なんて亜流だということを言われて、何をということで、カーッと頭にきたことがありました。皆にも報告しましたら、馬鹿なことを言うなということで、だいぶ皆カッカしておりましたが、そんなこともございました。

上海時代に移りますが、昭和18年、今申し上げましたように、ようやく国勢が衰え始めた頃に、少し大げさに申し上げれば、大日本帝国海軍第三艦隊、旗艦の「出雲」が黄浦江に泊まっておりました。黄浦江のドックに日本の軍艦が、海戦で損傷した箇所をドックで修理をするために上がってくるのです。ところが黄浦江の海軍陸戦隊管轄のドックはいっぱいで、とても軍艦を修理するような状態ではない。そうすると修理もできないで、そのまま黄浦江を下って、忘れもしません。大日本帝国海軍一等巡洋艦「愛宕」というのは、「最上」という一等巡洋艦と並び称せられるほどの優秀な一等巡洋艦でございました。これはどういうことかと申しますと、かつてイギリスのエリザベス女王のお父様のさらにお父様が即位される時に、日本から派遣されてきた軍艦なのです。その時に、列国の海軍が全部ずっと奉祝旗をメインマストに掲げて並んでお待ちしていた時に、一番最後に帝国海軍の秘蔵っ子である一等巡の「愛宕」という軍艦が入ったわけです。そうすると列国の海軍の皆はびっくりしてしまって、ハングリーウルフ、飢えた狼だという表現で「愛宕」という艦を賞賛したというぐらい有名な一等巡洋艦です。それが後甲板の三分の一ぐらい壊れたまま、黄浦江に出て揚子江へ出ていったのです。その時に棒振れということで、甲板に皆並んで、棒を振って、我々居留民に向かって別れを告げて出ていく、その姿を見た時には本当に胸が張り裂けるような思いがいたしました。

その時でございます。黄浦江に停船をしておりました「コンベルベ」という、イタリアの3万トン近い客船がありました。イタリアにムッソリーニに対抗するバトリオ政権が誕生したので、船底の栓を抜いて、黄浦江に横倒しになっちゃったのです。そこで、起こす時には日本が当然やらなきゃいけませんから、この船を元通りに起こすのか、起こさないかということで、中国人の間で賭けが行われたのですね。大部分は、これはだめだと、こんな巨船が起こせるわけがないじゃないかということで、中国人に賭けを入れた連中がいたのです。ところが日本の、いわゆるサルベージと言いますか。日本の技術は見事にその巨船を起こしてしまいました。三角屋根のユダヤ財閥のシンボルのビルが今あるのですが、あそこに若干傷のついた程度の何万トンという巨船が起きてしまったのです。日本の技術というものは素晴らしいんだとい

うことを立証した一幕でありました。
そうこうして、書院を卒業ではないですが、仮卒業というような意味で内地へ引き上げてきたのですが、旧制中学の中で同文書院に入ったのは126名。私は虎の門の大倉高商の講堂で試験を受けたのですが、その頃旧制中学で4年生からタバコを吸っておりました。先生に見つかると当然叱られるし、何か罰をくらうんですね。教室でタバコを吸っていたら、そこへ先生が入って来た。火のついたタバコをそのまま握りしめた。その傷が未だにここに残っています。しかし私は東亜同文書院に入学しました。16人に1人という難関でした。学校の先生は、よくぞ難関を突破したということで、お前の停学を解くときたんですね。僕は「解く必要ない。俺は停学のまま東亜同文書院に入るんだ。」と、ごねたことがあります。私は東京で入学したのではありません。父が上海におりましたので上海に帰っておりまして、上海で合流して入ったんです。ですから伊勢神宮を参拝したあの尊い経験はありません。
126名が入りましたが、その内、およそ105名、正確に言いますと107名が、すでに天国にまいりました。残っているのはほんの20名ほどですが、それでも言語が満足にしゃべれるかどうかというのは、さらにもっと数が絞られます。幸い90歳になりましたが、内臓はどこも悪くありません。記憶もしっかりしております。先輩方に本当に本当に可愛がっていただいて、今日があるわけでございます。湊(40期)さん、ああいういい先輩もおられましたし、諸先輩に囲まれ、あるいは同輩に恵まれて今後も命のある限り、東亜同文書院のことを忘れずに喜んで歩んでいきたいと思います。今後ともどうぞよろしく。

司会　ありがとうございました。素晴らしい、元気のいいお話を伺いました。ここでちょっと、ここに来れなかった先輩方の消息をかいつまんでご案内します。
25期の安澤さん、今年何歳だと思いますか。107歳です。それで去年も今頃訪問してお会いしたのですが、今年も施設のほうへ、そんなお話をしたら、今ノロ（ウイルス）だとかインフルエンザだとかいろんなものがあって、出入りはお断りしておりますというふうに言われました。それからこちらのほうへお出でいただけないか云々ということは、家族を通じてということでした。ご容態については、やっぱり107歳相応の、去年の状況よりもだいぶ弱ったというふうに伺っております。ただし、ベッドから下りて、起きて食堂へ行って、介添えを受けながらお食事をしているということです。（註：２０１４年２月22日逝去されました）
それから、36期の藤田さん。私宛てに電話があり、ご一緒に電車で来ようということを話して、出席の返事をしました。けれども、昨日電話があり、やっぱり行って皆さんと付き合うのは自信がない、ということで、残念だけど皆さんによろしくと言われました。
41期の高瀬さんは最初に出席の返事が来ましたけれども、奥さんが転倒して事故を起こしたということで、今日はちょっと行けそうもないということを、高瀬さんからも昨日お電話がありました。本人はお元気ですけども、残念ながら欠席ということです。

事務を担当しておった逢坂さんも来てくれるのかなと思ったんですが、明日まで海外旅行ということで残念ながら行けないということで、皆さんによろしくと言われました。

今後の予定については、滬友会の方の予定については、４月の上旬ぐらいに根津先生の総持寺での墓参をいたします。10月の中旬から下旬にかけて、荒尾先生の全生庵の墓参をします。

愛知大学の方では、本間先生の墓参を5月の第一土曜日ぐらいにいたします。また具体的にはご案内します。

そのほか、7月には関東４支部では総会が開かれます。先ほどご案内しましたが、神奈川では7月12日に行われます。あらためて各支部からご案内をしますので、ぜひ参加をいただいて、いろんな情報交換をしていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

これで時間もそろそろ終わりに近づきましたので、寮歌の方に移りたいと思いますが、皆さんから、これだけは伝えておきたいことがあれば。中子さん一言お願いします。

中子良一　私は44期の中子です。昭和18（1943）年に東シナ海を167名で渡りました。この間は、同期の総会を開いた時はざっと5名ぐらいしか出てこれなくなって、本当に寂しい限りになりました。同窓会としては毎月木曜日、例会を開いておったのですけども、ほとんど参加者がいなくなったものですから、42期の倉田さんが創設された三金会に合併しました。同文書院の同窓会としてはこれが一つの、だいたい一種の会合だと思います。三金会ですけれども、今はほとんど中島寛司さんにお任せしてしまっていて、あらためてお礼を申し上げる次第であります。三金会はだいたい第三金曜日の一時半から三時ぐらいまでですね。いろいろ話をして、帰る。そういうことなんですけれども。特に何かしゃべらないといけないかということは何もないのですね。それでもいいと思うんですが、この機会に三金会としては、12時頃から少し講演会なり、何かそういう話もあったら、そういうものを入れてもらって勉強できたら、そのほうが何か役に立つんじゃないかと思ってね。そういうふうなことを私は思っているわけです。

三金会の方ではそういうことですが。その次は寮歌祭のことですね。寮歌祭は（昭和）38（1963）年から40年間、日比谷公会堂でずっと日本寮歌祭をやってきました。これは同窓会方式でして、それぞれ各校で同窓会基金を持ち寄って運営しましたから、非常に盛大にやっていました。日比谷公会堂もなかなか歌いやすいところでしたし。40回で終わるっていうことだったのですけれど、それじゃあ足らんということで、各個人の方式で、それぞれ各校を代表してやるということで、50回までやったんですね。一応、それでず

っとやってきたわけです。寮歌祭といっても特にあれですけれど、愛知大学の人たちがいろいろ応援してくれるからね。一年に一回だけですけども、一緒に歌えるっていうこともあって。今、50回過ぎた後は中央寮歌祭でやってますけれども。これにできるだけ参加していただいて、愛知大学の人らとも親交を深める機会になればと思います。もともと寮歌っていうのは、そう難しくも上手に歌うこともないわけですからね。自分一人でと歌う歌は苦労するけれども。愛知大学の人らと一緒に助けてもらって歌っていくつもりで、今後ともぜひできるだけ出席してやっていきたいと、そういう具合に考えておるわけです。よろしくお願いします。

司会 ありがとうございました。書院の皆さんはいろいろと人生豊かですから、話題が豊富で、いくら時間があっても足らないと思いますけれども、時間もそろそろ後半になりましたので、ここで寮歌を歌っていただきたいと思います。その後は、愛知大学の東京事務所へ行っていただきたいと思います。

それでは書院の皆さん、お手元に歌詞が配られたと思いますけども、寮歌を歌っていただきたいと思います。今お話の、現在の寮歌委員長の中子さんよろしくお願いしたいと思います。若いと思う方は立っていただいて、こちらの方へ来ていただきたいと思います。皆様、歌詞はお手元にございますか。

中子 東亜同文書院44期の予科の中子良一です。それでは院歌から。院歌全部歌いますから、皆歌って下さい。東亜同文書院、院歌1、2、3。

（歌を歌う）

司会 時間が限られておりますので、「長江の水」を歌います。ご唱和下さい。1番、2番、7番、破れんほどにご唱和願います。「長江の水」。1、2、3。

（歌を歌う）

司会 ありがとうございました。ほかに、この歌を歌おうという方いらっしゃいますか。

中子 それでは大旅行の歌、「嵐吹け吹け」を。

（歌を歌う）

司会 それでは工藤さん、お願いします。「桃李の吹雪」。1番、3番、5番。お願いします。

司会　はい。ありがとうございました。まだ寮歌はありますけれども、とりあえずここで書院のほうの寮歌を終わって、愛知大学の逍遥歌をお願いしたいと思います。小川さんお願いします。

小川悟　愛知大学が日本寮歌祭に参加しましたのは昭和62（1987）年の第27回からです。この参加にあたって大変お世話になりましたのが、東亜同文書院の確か40期の秋山征士さんだと記憶しております。その時以来、全国あちこちの寮歌祭に参加しまして、私どもが歌いますと、愛知大学は東亜同文書院の流れかと、おれの親父も同文書院だった、あるいは、おれの兄貴も同文書院だったという方が大勢いらっしゃいまして、応援をしていただきました。実は昨年の12月15日に三重県の宇治山田の神宮皇學館大学で寮歌祭がありました。その時、中子さんを先頭に愛知大学は15人で参加しました。

中子さんが「長江の水」を歌い出したところ、ある方が壇上に上ってまいりまして、一緒に歌おうと、（旧制）大阪商科大学の堀江義彰さんでした。私

はその時歌詞を渡したところ、いや、僕は同文書院の歌なら全部歌えるからと言って、「長江の水」と大旅行の歌「嵐吹け吹け」を一緒に歌っていただけました。伺いますと、堀江義彰さんのお父さんが、東亜同文書院の教授をなされていた堀江義廣さんとおっしゃいます。分野は私存じませんが。したがって、東亜同文書院の官舎で生まれて育ったんだと。だから同文書院も全部歌えるというふうにおっしゃっていただき、私ども非常に勇気づけられたのが、つい先月の12月15日でございます。全国どこへ行ってもこのように同文書院の方々が応援していただけるのは、愛知大学ＯＢとして大変嬉しい気持ちでございます。今日は感謝の気持ちを含めて、愛知大学逍遥歌、１番と２番を歌ってまいりたいと思います。「逍遥歌」、「月影砕くる」。

（歌を歌う）

司会　この作詞の亀田さんも書院生ですから、そういう点では雰囲気が書院の寮歌と似てるんじゃないかと思います。

今後の記念センターのいろんな行事が盛りだくさんになっておりますので、皆さん一つ、その情報については具体的に発表されるのを楽しみにしていただきたいと思います。それでは寮歌の部はこれで終わりまして、田辺課長に後のことをお願いしたいと思います。

田辺課長　皆様、お疲れ様でした。豊橋研究支援課の田辺でございます。本学は東亜同文書院からの結晶ですので、東亜同文書院大学記念センターとして様々な行事を開催し、伝承を広める努力をしております。お手元の『ニュースレター』に、昨年開催した授賞式から1年間の行事等をまとめさせていただきました。

２月に沖縄で展示会、講演会を開催させていただきました。芥川賞を受賞された大城立裕さん（44期予科）と、本学同窓生で、沖縄県税理士会会長の百田さんに講演をいただきました。ちなみに沖縄県税理士会会長は本学同窓生が二代続けてなされています。

皆さんからいただいた史資料を大切に保管するために、収蔵史資料庫を本学に作りました。みなさまのお手元にご提供いただけるものがありましたら、よろしくお願い申し上げます。

国際シンポジウム「孫文と東アジアの平和」を7月に開催しました。

本学大学記念館は、築107年目です。豊橋市と大学記念館がタイアップしまして、スタンプラリーの会場として提供しました。（写真を示して）小学生が大勢来館し、旧学長室のかつての学長の椅子に座って喜んでいる写真でございます。このような行事等が豊橋市にご理解をいただきまして、８月１日、豊橋市文化振興賞をいただきました。

10月に今年度の展示会、講演会を長崎で行いました。小崎さんにも講演をいただき、先ほどお話した状況です。長崎との関連をパネルにまとめました

ので、3月発行の『記念報』をご覧頂ければと思います。なお、昭和12（1937）年当時の長崎新聞に、同文書院の長崎開校という記事が掲載されておりましたので、これも『ニュースレター』にて紹介させていただきました。あわせて、御幡雅文先生（書院で中国語を教えた人物）のお墓の所在が分かりましたので、当センターの藤田名誉教授と森課員が、調査をした内容をまとめております。

長崎展示会と、かつて行いました米沢と本間喜一展をアーカイヴズ特別展として大学記念館にて開催しました。

国際シンポジウム「近代日中関係史の中の東亜同文書院」を12月14、15日に開催いたしました。特に大旅行調査のことをお披露目しました。この内容につきましても、『記念報』のまとめでお伝えしようと思っております。

こちらの『ニュースレター』ですが、実は昨日できたばかりです。当センターの行事をご理解いただけたらとの思いでまとめましたので、ゆっくりご覧いただきたくお願い申し上げます。今後とも愛知大学をご支援いただきますようよろしくお願いいたします。本日はお忙しい中、皆様お集まりいただきまして誠にありがとうございました。これにて、授賞式・懇親会を終了させていただきます。

◇表紙写真ご芳名（敬称略）

田辺	杉浦	高遠
堀田	倉持	工藤
高井	阿部	星
有森	福原	山田
荒尾	幅舘	佐藤
小川	殿岡	岡部
岡村	熊谷	平井
小林	関谷	小崎
樋口	中子	藤田
夏目	釜井	阿部
森	田沼	
	中山	植前

本間先生欽慕の会

平成25年5月11日(日)
東京小平霊園

【参列者】（敬称略）

◇本間家　本間万里子、殿岡晟子、高橋光子

◇愛知大学　藤田佳久（名誉教授）、樋口裕嗣（校友課長）、夏目益良（東京事務所長）、中村真由（東京事務所）

◇滬友会　小崎昌業（42期）、中子良吉（44期予）、幅舘卓哉（44期専）飯塚啓（46期予）、島田純一（46期予）、関口忠彦（46期予）長澤源夫（46期専）

◇愛大同窓会　杉浦福夫、小川千尋、小川悟、山田晃司、高井和伸、南昌彦中島寛司、岩間毅、伊藤寛一、由比淳子、青山典隆、戸田七支谷中武比古、山田義郎、中川善弘、荒尾初雄、山本墾

根津山洲先生墓参　桜花忌

平成25年3月31日(日)
横浜の鶴見総持寺にて

桜花爛慢のもと、正午に墓前に、生花を供え、精進院殿徹道一貫大居士に、参列者それぞれにお線香を供え拝しました。あと般若心経を唱え、院歌、長江の水、桃李の吹雪、嵐吹け吹け、愛大逍遥歌などを献じ墓前をあとにしました。直会は、鶴見駅前野の蓬莱春飯店にて、紹興酒で献杯、美味しい中華料理と美酒に酔い、上海時代の思い出話しや現下の世相に触れ、歓談尽きることなく。飯店の主人が天津出身とのこと、みな親しみを感じ、杯もすすみました。
参列者：(左から)中島寛司、小川悟、小崎昌業(42期)、中子良吉(44期)、村上武(18期準)　の5名(敬称略)

荒尾東方斎先生墓参

平成25年10月30日(水)
東京谷中の全生庵

山岡鉄舟を開基とする名刹全生庵の墓前に集い、生花とお線香を供え、各位お水で清め、拝礼しました。また恒例により般若心経を唱え、院歌、長江の水、桃李の吹雪、嵐吹け吹け、などを献じ墓前をあとにしました。この全生庵の山門脇には、孫文の辛亥革命を支援して、恵州起義に参戦殉じた山田良政の顕彰碑があり、この御前にても一同拝礼しました。記念写真は、いつもの本堂を背景に撮りました。直会は、同寺庫裡にて、お弁当、お酒を食し楽しみ、各位の話題に関心を寄せました。
参列者：(左から)中島寛司、中子良吉(44期)、村上武(18期準)、小崎昌業(42期)、荒尾初雄、幅舘卓哉(44期)、藤田佳久(愛知大学名誉教授)、福原昭二(45期)、荒尾与志子、の９名(敬称略)

オピニオン

旧制高校

寮歌物語 ㉕

受け継がれた「夢と情熱」

■「外地組」学生の受け皿に

昨年秋、名古屋市の愛知大学で開催された「アジアに羽ばたく記念寮歌祭」（同大同窓会主催）に同大草創期の出身者や関係者が勢ぞろいした。

同大の前身に近い東亜同文書院大学（上海）をはじめ、満州（現・中国東北部）にあった建国大学、日本統治時代の朝鮮（同韓国）の京城帝国大学、台湾の台北帝国大学、台北高校などから戦後、愛知大学へ移った人たち。白線帽をかぶり、出身校名や校章を染め抜いた法被を身にまとった、かつての紅顔の美少年も今や80代から90代である。

建国大出身で、1947（昭和22）年に愛知大に移った佐藤達也（1926年～）はひとりで建国大予科の寮歌『逍遥歌』を歌った。「当時、建国大から愛知大に移った11人のうち、残っているのはボクを含めて3人だけ、もうみんな85歳以上ですよ」

元最高裁判事の園部逸夫（1929年～）は台北帝大教授だった父親が引き揚げ後に愛知大の教授に就任した関係で当時の雰囲気を知っている。自身は旧制台北高から四高（金沢）に移った。「たまたま四高の校長先生が京城帝大から来られた方で、外地からの引き揚げ組に理解があったので助かりました。まったく受け入れない高校もありましたからね」

愛知大は、こうした外地からの引き揚げ組の〝受け皿〟となるべく設立された。日本でも類を見ないユニークな成り立ちの学校なのである。

■命懸けで守り抜いた学籍簿

1946（昭和21）年2月、東亜同文書院大学の最後の学長となった本間喜一（1891～1987年）は「自分の命に代えても」と強い決意で守り抜いた学籍簿と成績表とともに日本に引き揚げてきた。

この2つの書類は学生の国内各大学への転入を可能にしたが、時間の経過とともに転入は困難を増してゆく。外地組の〝受け皿〟となる新大学の必要性を痛感した本間らは、愛知県豊橋市の陸軍予備士官学校跡地に「愛知大学」を開校させることを決意したのである。

〝最後の旧制大学〟（学部3年制、予科3年制）となった愛知大は翌1947年4月から授業を開始した。教授陣は東亜同文書院大や京城帝大、台北帝大などから。約400人の学生は約4割を東亜同文書院大（予科を含む）出身者が占めたが、総校数は約80校に及ぶ。

元ルーマニア大使の小崎昌業（1922年～）は東亜同文書院大から愛知大の3年に編入した1期生だ。「（東亜同文書院大の）同期生は東大や京大、東京商大（現一橋大）に移りましたが、ボクは引き揚げが遅かったので、どこも受け入れてくれない。困っていたときに（東亜同文書院大の）先生が『大学を作るからこっちに来い』と誘ってくれたのです」

こうした経緯で集まった学生たちは〝ツワモノ〟ぞろい。ボロボロの元兵舎を利用した寮で共同生活を始めたものの、最初はまとまりを欠いていたらしい。そこで初代寮委員長に就任した小崎は一計を案じた。「みんなを強引に集めて寮歌祭を開催したのです。豊橋の市民の方々にも参加してもらいました。この寮歌祭で一気に団結力が強まった気がしましたね」

東亜同文書院大の寮歌は20曲近い。アジアに羽ばたく勇壮な若者の姿を歌った1907（明治40）年制定の『院歌』をはじめ、書院伝統の大調査旅行の門出に当たり、士気を鼓舞するために歌われた『馬賊の歌』『長江の水』などは、いまなお歌い継がれている。新天地に活躍の場を求めて海を渡っていった、当時の学生たちの夢や熱気が伝わってくるような歌ばかりだ。

■足で稼いだ「大旅行」報告

東亜同文書院（大学）とはどんな学校だったのか？

中国語の習得とともに、教育の大きな柱となっていたのが先に挙げた「大調査旅行」の制度である。卒業時に学生たちがテーマを決めて数人のグループをつくり、数カ月をかけ中国大陸を徒歩で旅行する制度。そこで得た調査、研究資料をまとめて報告書をつくり、それが「卒業論文」となる仕組みだ。

コースは延べ700に及び、訪問先では知事、市長らの要人と面会し、危険な地域では歩兵による護衛もついた。報告書は『支那省別全誌』『支那経済全書』として学術的に高い評価を得たという。そしてときにそれは日本の国益のために生かされる貴重な情報にもなった。

愛知大名誉教授の藤田佳久（1940年～）は、著書『日中に懸ける 東亜同文書院の群像』（中日新聞社）で、日英同盟時代のイギリスから日本の外務省を通じて学院生に「西域へのロシアの浸透状況」についての調査依頼があったエピソードを書いている。

《当時の西域は日本人にとって未知の世界。漢民族にとっても時に自分たちを襲ってくる遊牧の異民族だ。そこは玉などの宝石類、毛皮やブドウなどが豊富な憧れの地でありながら、簡単に足を踏み入れることはできない所であった》

同書によれば、5人の学生は日露戦争下の1905（明治38）年に北京を出発。新疆、外モンゴルなどの地域を丸2年かけて調査している。言語、経済、農業、道路の状況などに対する詳細なリポートは、日本人による初めての本格的な西域調査報告書になった。

こうした学生の大旅行を先々でサポートしたのが、学院出身のOBたちである。小崎はこう話す。「上級生、下級生がとても親密な学校でした。メシも食べさせるし酒も飲ませてくれる。下級生は上級生の〝メシつぎ〟をしたり掃除をやる。『大旅行』のときも先輩がボクたちを喜んで泊めてくれました」

一方、東亜同文書院大学専門部を出た幅舘卓哉（1924年～）は『上海時間旅行 蘇る〝オールド上海〟の記憶』（山川出版社）の中でこう語っている。《学生は日本人ばかりでなく、中国人や朝鮮人、モンゴル人、白系ロシア人など様々な人種がいました。戦後になって、東亜同文書院のことを中国大陸侵略の橋頭堡のようにいう人もいるようですが、それは違います。自分たちは中国人だけでなく他の民族とも真の友好関係を築くんだという気概に溢れていました》と。

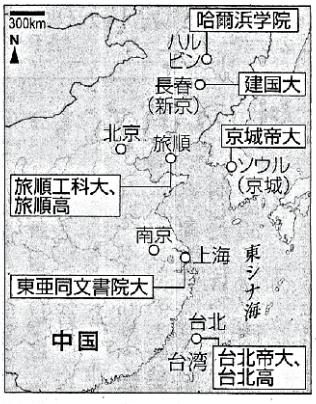
小崎によれば戦前、東亜同文書院から毎年、多くの人材が主に中国の専門家として外務省に入ったという。中国を知り尽くし、語学にも堪能な人たちはさぞかし有能であったろう。

愛知大が発足するとき、GHQの意向によって「東亜同文書院大学」の名称を名乗ることはかなわなかったという。だが、1993年、愛知大に「東亜同文書院大学センター」が設置され、学籍簿や成績表、大旅行の調査報告書などが保存されている。学生たちが足で稼いだ貴重な記録、「日中友好の促進」を掲げた建学の精神はこれからも受け継がれてゆく。＝文中敬称略

（文化部編集委員　喜多由浩）

上海にあった東亜同文書院（愛知大学東亜同文書院大学記念センター蔵）

愛知大で開催された「アジアに羽ばたく記念寮歌祭」＝昨年11月、名古屋市内



戦後、愛知大へ移った外地の主な出身校は図の通りだが、内地（日本国内）の学校からの移籍組を合わせると、総数は約80校に及んだ。

東亜同文書院　1901（明治34）年、東亜同文会（近衛篤麿会長）によって上海に設立された日本人のための高等教育機関。1期生は、1府16県から選抜された県費留学生51人と私費留学生4人の計55人。1939（昭和14）年、大学令によって専門学校から「東亜同文書院大学」へ昇格、予科（2年）、学部（3年）を開設した。終戦にともない閉校になるまで、日中間の政治、経済などに携わる人材を数多く送り出す。戦後、教職員・学生の多くは、愛知大学（1946年設立）へ移った。主な出身者は、元外相の武藤嘉文、芥川賞作家の大城立裕、元丸紅社長の春名和雄の各氏ら。

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長

退任の挨拶

馬場　毅（愛知大学現代中国学部教授）

私は東亜同文書院大学記念センター長として2011年4月に前任の藤田佳久センター長の後を継いで以来、3年間センター長を務めました。その間12年度に文科省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択されました。申請書類の提出に当たっては、藤田佳久先生に大変ご尽力いただきました。

私の3年間の在任中に思い出に残る事を以下に述べたいと思います。

①東亜同文書院、東亜同文会に関係する国際シンポジウムを行ったこと。11年度には辛亥革命百周年を記念して「辛亥革命・孫文・東亜同文会」、12年度には、台湾の中央研究院台湾史研究所との共催で「近代台湾の経済社会変遷―日本とのかかわりをめぐって―」を行いました。後者は本センターが台湾の研究機関と行った最初のシンポジウムです。13年度には台湾の国父紀念館および東呉大学との共催で「孫文と東アジアの平和」を行い、これを契機に台湾の国父紀念館の発行している全世界の孫文関係の博物館・記念館の案内書に本センターも入れてもらうことになりました。また本センター主催で「近代日中関係史の中の東亜同文書院」を行い、初日には「大旅行」関係、二日目には「東亜同文会・東亜同文書院と日中関係」を行いました。「大旅行」関係で8人もの報告が行われたのは初めてだと思います。今後の研究の成果が期待されます。

②東亜同文書院をテーマにして11年度富山、12年度沖縄、13年度長崎で展示と講演会を行いました。その際、各地の滬友会・愛大同窓会の方からご講演、並びに様々な御援助をいただきました。

③11年度から普段センターに行く機会のない現代中国学部の1年生全員に対して、名古屋校舎からバスをしたててセンターを参観させ、好評でした。

④12年度に本センターの貴重な資料のために、防湿性と耐火性にすぐれた収蔵庫を新設しました。この点では事務の方に尽力していただきました。

以上この間、いろいろとご支援とお世話になった滬友会、愛大同窓会の皆様に改めて感謝申しあげるとともに、今後も在学生のアイデンティティ形成の場であり、かつ同窓会と愛大を結ぶ結節点でもある本センターのさらなる発展と将来に於ける博物館化の実現を祈念しております。

新任の挨拶

三好　章（愛知大学現代中国学部教授）

私は2014年4月より、初代今泉潤太郎名誉教授、第2代藤田佳久名誉教授、そして第3代馬場毅教授の後を受けて、愛知大学東亜同文書院大学記念センター長に就任致しました。

私が愛知大学に奉職致しましたのは1997年、現代中国学部創設時からのことになります。それまで愛大の外におりました私にとって、愛大とは東亜同文書院の後継大学であり、そこに蓄積された中国研究はまさしく後世に誇るべきものでした。また、東亜同文書院そのものが戦前の上海という特別な地、すなわちアジアの、いや世界の近代史において焦点となる位置にあったと云うことも、書院に対する関心をいやが上にもますものでした。

愛大にお世話になり、書院記念センターに出入りするようになると、豊橋の建物の歴史ある風情にどこか懐かしさを覚え、緑の多いキャンパスにも愛着が湧くようになりました。そして、藤田先生のご尽力と多くの書院ＯＢの方のご協力で出来上がった書院大学記念センターの展示を拝見して、今更ながら愛知大学と東亜同文書院との深い関わりに感じ入りました。書院大学記念センターには、創立時の根津一院長、辛亥革命に先立つ恵州蜂起で命を落とした山田良政、さらに孫文はもとより蔣介石や何応欽などの写真や書画も所蔵されており、近代日中関係史の宝庫であることが次第に分かってきました。こうした資料を、愛大図書館が持つ霞山文庫などと共に公開し、多くの人たちにご覧頂きたいと思います。また、書院ＯＢの方々の活動の跡をたどり、それを歴史的に跡付け、証言を頂くことも重要な仕事だと考えております。現在、東亜同文書院大学記念センターは「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択されておりますが、これは「学術高度化推進事業」に続くもので、いずれも藤田教授・馬場教授のご尽力によるものです。

今後、藤田教授、馬場教授が残された業績を大切にしながら、書院の持つ現代的意義を検証し、なおかつ顕彰する仕事に微力を尽くしていきたいと存じます。到らぬ所ばかりでございますので、みな様の御指導ご鞭撻を心よりお願い致します。

東亜同文書院大学記念センター活動レポート

❶収蔵史資料室の新設

文部科学省より「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の採択を受け、事業開始の1年目（2012年度）に収蔵庫を新設しました。これは、当センターがある大学記念館が、博物館相当研究施設に近づき新たな研究拠点になるためです。

今まで収蔵庫はありましたが、収蔵庫機能としての課題があったことから、「火災や地震などの自然災害、温度や湿度、汚染物質から貴重な資料を守る収蔵資料庫」とのコンセプトのもと、耐火設備の収蔵史資料室を増設しました。これにより、センターが保持する貴重な史資料を保存・活用する施設が完成しました。

中日新聞 県内版　2013年（平成25年）3月28日（木曜日）　三河

貴重な歴史資料保管へ収蔵庫新設

「博物館」目標 研究に力

愛知大の前身である東亜同文書院を研究する愛大東亜同文書院大学記念センター（豊橋市町畑町）が、隣接する建物の会議室を改築し、貴重な歴史資料を保管する収蔵庫を新設した。研究が文部科学省の二〇一二年度支援事業として採択され、博物館相当の施設を目指して取り組みを進める。

（曽布川剛）

愛大東亜同文書院大学記念センター

貴重な資料の劣化を防ぐために新設された収蔵庫＝豊橋市町畑町の愛知大で

東亜同文書院は一九〇一（明治三十四）年、日中関係を構築する人材育成を目的に中国・上海に設立。四五年の敗戦で廃止されたが、翌年に教員や学生の受け皿として愛大が設立された。

記念センターは同書院関係資料のほか、一九一一年の辛亥革命を指導した孫文や、孫文を支援した山田良政・純三郎兄弟に関する資料を多数保管している。

「近代日中関係」など5テーマ

現在の収蔵庫は資料の盗難や消失、劣化の恐れがあるため、新たな収蔵庫を造った。広さは四十平方メートルで、湿度を一定に保つパネルや耐火性能に優れた扉と壁を採用し、良い環境で資料を保存できるようにした。

二〇一二年度から五年間で、文科省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として採択され、一九〇八年建設の記念センターの外壁も修繕して展示室を増設。近代日中関係に書院が果たした役割や書院学生が中国大陸や東南アジアを見聞した調査旅行など、今後は五つのテーマで研究を進めシンポジウムなどで公表していく。

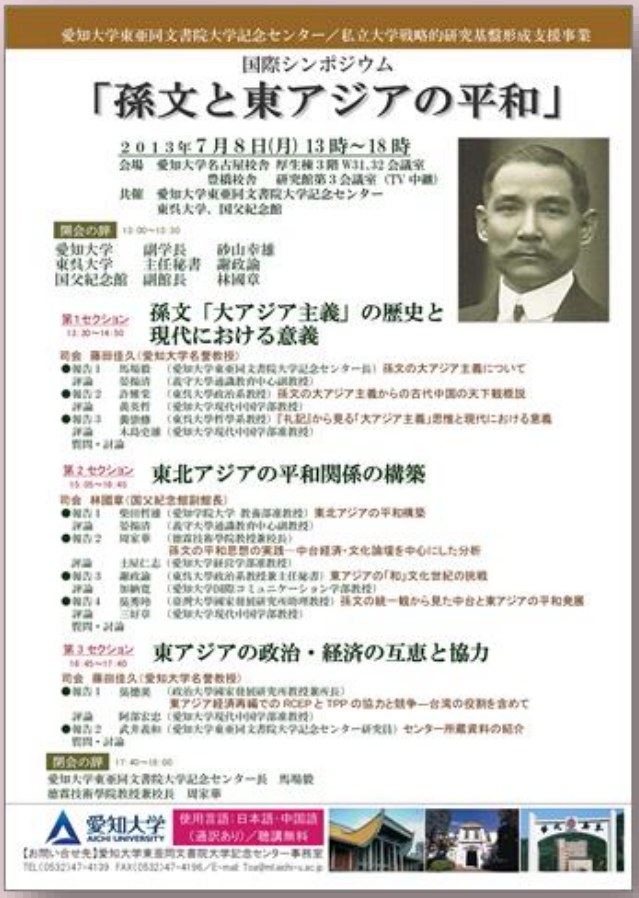
研究を進める藤田佳久名誉教授は「センターには写真や暗号表など価値の高い資料がたくさん眠っている。博物館のような形で表に出せるように研究を続けたい」と意欲を見せる。

❷国際シンポジウム「孫文とアジアの平和」

7月8日（月）、名古屋キャンパスにおいて当センターと台湾・東呉大学、国父紀念館との共催による国際シンポジウム「孫文と東アジアの平和」が開催され関係者を含め約60名の聴講者が参加しました。

本シンポジウムは、砂山副学長および謝政諭東呉大学主任秘書、林國章国父紀念館副館長による挨拶からはじまり、藤田佳久名誉教授、林國章国父紀念館副館長の司会の下、セクション1「孫文『大アジア主義』の歴史と現代における意義」、セクション2「東北アジアの平和関係の構築」、セクション3「東アジアの政治・経済の互恵と協力」の3つのテーマについて、日本・台湾総勢16名の研究者による報告と評論が行われました。活発な意見交換が行われた中、将来の東アジア共同体を見据えた現在の東北アジアの緊張関係の緩和という観点についても、孫文の思想と関連した貴重な提言をいただきました。

最後に馬場毅東亜同文書院大学記念センター長、周家華徳霖技術学院校長の閉幕の辞が行われてシンポジウムが終了しました。



❸とよはしスタンプラリー2013
―トヨッキーの夏休み絵日記―

7月20日（土）から9月1日（日）の期間にかけて豊橋市役所が企画したスタンプラリー「とよはしスタンプラリー2013―トヨッキーの夏休み絵日記―」に愛知大学の大学記念館がスタンプの拠点に選ばれ、当センターも協力しました。これは愛知県豊橋市のマスコットキャラクターであるトヨッキーの夏休み絵日記に描かれた場所（愛知大学大学記念館、穂の国とよはし芸術劇場、こども未来館、中消防署、とよはし物語館、豊橋市交通児童館、赤岩口車庫、のんほいパーク、豊橋市中央図書館）を巡るというイベントです。おもに市内の小学生が参加対象であり、夏休み期間中、市が運営する公共交通機関（渥美線、路面電車、路線バス）を利用して各施設に配置されたスタンプを集めると抽選で豪華な景品が当たりました。大学記念館内は小学生であふれました。

❹豊橋市文化振興賞受賞

8月1日、豊橋市の市制施行日記念式典において、東亜同文書院大学記念センターが2013年度豊橋市文化振興賞を受賞しました。豊橋市文化振興賞は、市内において芸術文化の振興又は文化財の保存・活用等に永年にわたり貢献のあった団体等に授与されます。受賞にあたり、当センターの旧陸軍第15師団司令部庁舎（1998年に文化庁より国の登録文化財として登録）の恒久保存と、愛知大学とそのルーツである東亜同文書院大学に関する公開展示など、豊橋市の文化振興に寄与した功績に対して評価をいただきました。

表彰式には、佐藤元彦学長および馬場毅東亜同文書院大学記念センター長が出席しました。今回の受賞を励みに、ますます研究を深め、地域に開かれた大学記念館をめざしてまいります。

❺長崎展示会・講演会

10月5日（土）、6日（日）の2日間、長崎市の長崎県美術館にて当センター主催の展示会・講演会「東亜同文書院大学から愛知大学へ」を開催しました。これは2012年度沖縄に続く事業であり、公益財団法人愛知大学教育研究支援財団との連携事業でもあります。

講演会は、美術館2階ホールにて開催し、初日の佐藤元彦学長の挨拶の後、両日ともに2講演を行い、あわせてホール内にて貴重資料展示と、ギャラリートークを開催しました。

2日間で140名の方々の聴講者があり、書院卒業生や書院生の御子息および関係者も多く参加されました。

展示会は、講演会場のほか、美術館内の運河ギャラリーにて開催し、25mにおよぶパネル展示スペース2面を中心に、各テーマに沿って、約70枚のパネルおよびポスターを展示しました。

運河ギャラリーは、美術館来訪者が立ち寄りやすい会場であることから、2日間で200名以上の見学者があり、本学およびルーツをアピールすることができました。

さらに今回は、東亜同文書院大学と愛知大学の長崎とのつながりを中心に紹介した先行パネル展「東亜同文書院大学と長崎、そして愛知大学へ」（9月22日～）を開催できたことから、長崎の方々に東亜同文書院大学と本学をより身近に感じていただけたと思います。

今回の展示会・講演会により、長崎のみなさまに本学をより知っていただくきっかけとなったことと思います。

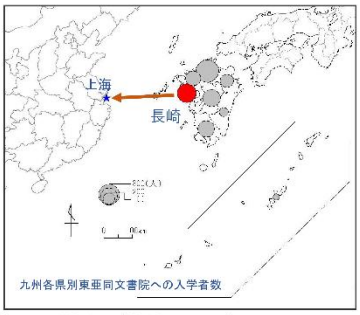
【10月5日（土）】
「長崎と近代中国」横山宏章（北九州市立大学教授）
「東亜同文書院大学から愛知大学へ」馬場毅（センター長）

【10月6日（日）】
「東亜同文書院大学から外務省へ」小崎昌業（東亜同文書院第42期生）
「東亜同文書院生による中国大調査旅行と近代中国像」
藤田佳久氏（愛知大学名誉教授）

長崎と東亜同文書院

東亜同文書院（のちに大学）の新入生が日本から上海へ向かう際の出発の地は、ほかならぬ長崎であった。さらに、東亜同文書院にとっては、大陸への玄関先であるだけでなく、そのほかでも縁が深い県であった。

入学者数をみると、1901年の書院創設から1945年の日本敗戦による閉校まで、東亜同文書院では約5,000名の学生が学んだが、出身県別の入学者数でいえば、第１位の福岡県（345名）に次ぎ、第２位（258名）であった。以下、熊本県（207名）、鹿児島県（199名）と続く。



九州各県別東亜同文書院への入学者数

また、長崎は書院生にとって、東亜同文書院が度重なる戦禍に見舞われた際の避難先であった。

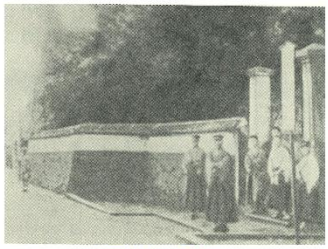
まず、1913年に中国で勃発した「第二革命」では、校舎が被弾・炎上したため、同年8月から10月の2ヶ月間、現在の大村市にある正法寺と本経寺を借用して仮校舎とした。

上海に復帰後、1917年には新校舎「虹橋路校舎」が落成されたが、1932年に第一次上海事変が勃発し、再び長崎に避難した。

さらに1937年には第二次上海事変が勃発。長崎へ一時引揚げ、長崎旧女子師範学校（現在の桜馬場中学校）を借用した。ここでは1938年4月に上海へ復帰するまでの6ヵ月間借用し、授業を継続した。

このように、長崎は東亜同文書院にとって縁が深い県であった。

大村仮校舎での授業風景


大村仮校舎・正法寺

❻アーカイヴズ展
「東亜同文書院大学から愛知大学へ」

11月3日から30日までの期間、愛知大学記念館にて、当センター主催のアーカイヴズ展を開催しました。本企画展は11月3日に行われました豊橋校舎での公演「愛知大学創設者『本間喜一物語』―はじまりの手紙―」とのタイアップ企画であり、これまで全国各地で開催してきた展示会・講演会の中から、2010年度および2013年度に一般公開した史資料展示を各特別展示室に再現し、アーカイヴズ展として特別公開しました。

公演「愛知大学創設者『本間喜一物語』―はじまりの手紙―」は、事前に各新聞に告知が掲載されたこともあり、愛知大学関係者や同窓生だけでなく、一般の方も多くご来場いただくことができ、会場は満席に近い状態となりました。

愛知大学設立直前に、本間喜一が甥と母に宛てた書簡

2009（平成21）年10月、東置賜郡川西町玉庭の本間喜一生家の中から、たいへん貴重な資料が発見された。それは愛知大学設立直前の1946（昭和21）年9月20日付の、本間喜一から甥の小池信哉氏宛ての書簡（実母くにへのものと言ってもよい）で、愛知大学設立に向けた強い決意を表している。その書簡の主な記述（太字）を見てみよう。

まず「**この夏は近来なき多忙にて疲れ申候、五月以来同文書院大学に代る大学を設立し、学生教授達を救済致し度く**」とあるが、創立後しばらく、“愛知大学と東亜同文書院とは無関係”との声もあったことがある。しかし本間喜一は、1952年の国会証言においても、“私は東亜同文書院に代わるような愛知大学を創立した”と明確に述べている。敗戦後海外から引き揚げてきた、東亜同文書院大などの教員・学生の救済は、同僚や学生、ひいては国家への愛情のあらわれである。

次の項では、豊橋市やその他地域の人達の寄附に感謝するとともに、戦後のインフレ収束措置策などにより「**募金に都合悪しく、容易なものに無之**（これなく）**候**」とあり、親せき筋にあたる林毅陸（元慶応義塾大学総長・初代愛知大学長）と共に慶応の三田会を頼って募金集めに奔走し、「近来なき多忙にて疲れ」たという。

続いて「**十月開校**」「**来年四月法経学部、そして文学部、農学部、水産専門部を設置致し度く**」「**将来大陸に志す者の中心人物を養成致し度く存じ候**」とあるのは、東亜同文書院の精神を継承しているものであり、同時に地域の文化向上と、農産物の生産や、水産物の加工に適する東三河地方（愛知県東部）の特徴を見抜いていたのであろう。そのために、「**あき子**（長女晟子）**と妻は豊橋、忠彦**（長男）**と昌公**（次男昌二郎）**は東京**」に住まわせる覚悟と、一家の役割分担までを決め、起業家・創業者の熱意をもって大学設立に取りかかったことがうかがえる。

また、当時の経済・食糧事情について、「**米は一升八十五円**」「**只今は粉の配給、さつま薯の配給あり助かり**」「**六月はほんとに餓死に近きもの**」「**小生は十四貫五百匁**（約48kg）**と相成約四貫五百匁**（約15kg）**も体重減少**」したと告白するとともに、「**世界の食糧事情改善されねば、昔の安い米も小麦も輸入し得べく、都市生活者は、本年の様な愚な事許り繰り返す事有之**（これある）**まじくと存じ申し候**」と、農業や経済政策についての意見を述べている。

最後に、「**いくら世は末世とは云え、結局道義に依って立つ事が大切に候。最後に幸福を来すものは利己に非ず、道義と確信仕候。小生の此度の大学設立の如き若し成功するとすれば、決して金やなんかの御蔭に非ず、専ら小生五十年は清貧に甘んじ正義の道を進んで来た跡を認められた結果と存じ申候。目先の小さな利益許り追かける者の到底なし遂げ得る所に無之候**」と結んでいる。

❼国際シンポジウム「近代日中関係史の中の東亜同文書院」

12月14日と15日の2日にわたり、東亜同文書院大学記念センター主催の国際シンポジウムが名古屋校舎で開催されました。これは文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の研究プロジェクト「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」における2つの研究グループによる国際シンポジウムです。

報告者は本学の教員や大学院生、記念センター研究員のほか、日本国内のみならず中国や台湾からも研究者を招聘し、さまざまな発表が行なわれました。

【12月14日】

「東亜同文書院・大旅行調査から見る近代アジア」

「大調査旅行」からみる近代中国像グループによる8名の報告が行われ、東亜同文書院が毎年行なってきた「大旅行」から、当時の中国を中心としてモンゴルや東南アジアの状況等が明らかにされました。

【12月15日】

「東亜同文会・東亜同文書院と日中関係史の再検討」

近代日中関係の再検討グループによる6名の報告が行われ、東亜同文書院の前身だった日清貿易研究所も含め、東亜同文会・東亜同文書院のアジア主義及び興亜の思想や書院卒業生・山田純三郎の中国人革命家との交流、台湾人卒業生の戦後の軌跡や、書院経営母体・東亜同文会の朝鮮半島における活動展開など、多様な発表が行なわれました。

この両日は土日にあたりましたが、2日間で120名の来場者がありました。今回のシンポジウムは、東亜同文書院を中心としたさまざまな角度から、近代日中関係史や日本と近代アジアとの関係を考えるという点で、非常に重要な意味があったと思います。

主催：愛知大学東亜同文書院大学記念センター／文部科学省　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

2013年度　国際シンポジウム

近代日中関係史の中の東亜同文書院

12月14日（土）

東亜同文書院・大旅行調査から見る近代アジア

10：30-10：50
開会の辞
佐藤元彦（愛知大学学長）
趣旨説明
加納寛（愛知大学国際コミュニケーション学部教授）

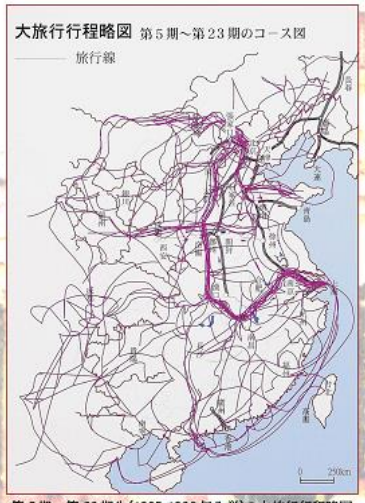
Ⅰ　10：50-11：40　司会：松岡正子（愛知大学現代中国学部教授）
●東亜同文書院生の大調査旅行の展開と記録された中国像
藤田佳久（愛知大学名誉教授、東亜同文書院大学記念センター・フェロー）
●書院生の見た中国
－五四運動後の対日反応を中心に－
劉柏林（愛知大学現代中国学部教授）

Ⅱ　12：40-13：55　司会：藤田佳久（愛知大学名誉教授）
●大旅行調査から見る東南アジアと日本
加納寛（愛知大学国際コミュニケーション学部教授）
●大旅行調査からみる四川辺疆
松岡正子（愛知大学現代中国学部教授）
●大旅行ルートの Google Earth によるトレース
－第12期生の「雲南班」の調査旅行コースから－
増田喜代三（愛知大学大学院中国研究科大学院生）

Ⅲ　14：10-15：25　司会：藤田佳久（愛知大学名誉教授）
●大旅行駐在班の調査成果からみた明治期における昆布生産・輸出状況
－山田良政の進路にも着目して－
高木秀和（愛知大学大学院文学研究科大学院生）
●書院生の内モンゴル中西部の社会経済調査を中心に
曉敏（愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員）
●明治期における同文書院のモンゴルでの調査旅行について
ウリジトクトフ（内蒙古大学蒙古学学院歴史学系准教授）

Ⅳ　15：40-17：00　司会：加納寛（愛知大学国際コミュニケーション学部教授）
総合コメント
黄英哲（愛知大学現代中国学部教授）
宋歓方（中国科学院地理科学与資源研究所教授）
総合討論

東亜同文書院虹橋路校舎（1917-1937年、上海）



第5期～第23期生（1905-1923年入学）の大旅行行程略図

12月15日（日）

東亜同文会・東亜同文書院と日中関係史の再検討

10：30-10：40
趣旨説明
馬場毅（愛知大学東亜同文書院大学記念センター長）

Ⅰ　10：40-11：55　司会：ローラ・リー・クサカ（愛知大学短期大学部教授）
●日清貿易研究所について
武井義和（愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員）
●東亜同文会のアジア主義について
馬場毅（愛知大学東亜同文書院大学記念センター長、現代中国学部教授）
●日本と『興亜』の間
栗田尚弥（國學院大學講師）

Ⅱ　13：00-14：15　司会：ローラ・リー・クサカ（愛知大学短期大学部教授）
●東亜同文会の対朝鮮事業
堀田幸裕（一般財団法人農山会文化事業部研究員）
●共同して革命し手を携えて実業へ
－何天炯と山田純三郎の中日をまたぐ革命的友情－
李長莉（中国社会科学院近代史研究所研究員）
●東亜同文書院の台湾人学生とその戦後の白色テロ経験
許雪姫（台湾・中央研究院台湾史研究所研究員）

Ⅲ　14：30-16：00　司会：馬場毅（愛知大学東亜同文書院大学記念センター長）
総合コメント
三好章（愛知大学現代中国学部教授）
総合討論
閉会の辞
馬場毅（愛知大学東亜同文書院大学記念センター長）

12月14日（土）・15日（日）
愛知大学名古屋校舎Ｌ７０５教室
●「名古屋」駅より徒歩約15分　●あおなみ線「ささしまライブ」駅より徒歩約5分

使用言語：日本語・中国語（通訳あり）／
予約不要・聴講無料　どなたでも自由に参加できます

【お問い合せ先】愛知大学東亜同文書院大学記念センター
TEL（0532）47-4139　FAX（0532）47-4196／E-mail: Toa@ml.aichi-u.ac.jp

愛知大学 AICHI UNIVERSITY

愛知大学は1946年に中部地方において、初めての法文系大学として愛知県豊橋市に誕生しました。その前身は、第二次世界大戦前、海外にあった日本の高等教育機関であり、とりわけ中国の上海にあった東亜同文書院（のちに大学）が中心となりました。

東亜同文書院大学記念センターは、1993年に設立して以来、本学の「生みの親」ともいえる東亜同文書院大学の総合的研究と、書院を継承した愛知大学史の研究を進めており、その成果はシンポジウムや紀要、ブックレットにて発表してきました。

現在は、文部科学省の研究プロジェクト「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の採択を受け、2012年から5年にわたり、5つの研究グループのもと研究を進めています。

研究活動のほか、センターがある大学記念館には本学の歴史などを紹介する展示室があり、見学者への案内・解説もしています。来館者数は年間3000名を超え、本学学生のほか、高校生や国内外からの研究者など、広く来館いただいています。来館者の中には史資料を寄贈くださる方もおられ、整理・保存活動も行っています。

センター事業に賛同をいただけ、東亜同文書院大学・愛知大学に関する資料等を提供いただける方は、当センターまでご連絡ください。お願いいたします。

大学記念館／東亜同文書院大学記念センター
連絡先　0532-47-4139
開館時間　10時～16時
休館日　月・日・祝日・大学が定める休日

国際シンポジウム

2013年「近代日中関係史の中の東亜同文書院」
「孫文と東アジアの平和」
2012年「近代台湾の経済社会変遷－日本とのかかわりをめぐって－」
2011年「辛亥革命・孫文・東亜同文会」
2010年「戦前外地にあった愛大ルーツ5校の出身学生が語るアジアと愛大」
2009年「欧米研究者から見た東亜同文書院」
2008年「東亜同文会の東アジアにおける教育活動とその展開」
2007年「日中研究者による東亜同文書院研究」
「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」

展示会・講演会

2014年	広　島	2010年	京　都
2014年	岐　阜	2009年	神　戸
2013年	長　崎	2009年	シカゴ
2012年	沖　縄	2008年	福　岡
2011年	富　山	2008年	弘　前
2010年	名古屋	2007年	東　京
2010年	米　沢		

出版物

・同文書院記念報（vol.22まで刊行）
・ブックレット（第8巻まで刊行）
・愛知大学創成期の群像　など

［左から］佃センター研究員、野口センターP.D.、藤田名誉教授（センターフェロー）、田辺豊橋研究支援課長、武井センター研究員、森センター職員